

領域5インフォーマルミーティング議事録

日付：2021.9.21

出席者：領域代表・副代表・運営委員 6 名を含む計 22 名

配布資料：発表スライドをPDFで配布

<審議>

- 1-1. 次期 代表・副代表の紹介
次々期の運営委員の推薦
承認された
- 1-2. 2022 年国際ガラス年記念シンポジウムの提案
承認された
- 1-3. 非エルミート系合同セッションの提案
承認された
公開される文面に「c どちらでもよい」という選択肢があるが、その後どのように扱われるかわからないので、なくても良いのでは、という意見が挙がった。そのことを領域 4 へ申し伝えることが確認された。
- 1-4. 学生優秀発表賞の一部変更の提案
詳細は後述する

<報告>

- 2-1. キーワードの大幅な見直しを実施
詳細は後述する

<案内>

- 3-1. 招待講演・シンポジウム・企画講演
- 3-2. 招待講演とチュートリアル講演の区分け

次々期の領域5運営委員の推薦

1. 田原 弘量 (京都大学)
 2. 吉川 尚孝 (東京大学)
 3. 堀尾 眞史 (東京大学)
- 承認された**

学生優秀発表賞の一部変更の提案

提案の主旨説明が副代表 木村 よりなされ、実施の可否および実施する際の方法が議論された。主旨は、年次大会でも何らかの発表賞を設け、発表数の増加を目指す、というもの。（補足：年次大会の発表数が若手奨励賞の受賞者数に影響するため、発表者数を増やしたい。現状では、年次大会では、発表賞を設けている他の領域に学生が流れている可能性がある。）

運営委員および審査員の負担

- 審査員の数をそろえ、振り分ける負担が増える
(現在は、ポスター賞の候補者数と同数の審査員を配置している)
- 審査員がセッションをまたいで聞きに行く手間・負担がある

負担の軽減策

- 発表内容やキーワードで区別せず、候補者だけを集めたセッションを作る
少ない審査員で多くの学生を審査できる利点
学生は他分野の人に理解されるような発表を目指す教育的な効果がある
- 審査委員の選定基準を緩和する
例えば、直近 3 年間で審査を担った人を候補から外すなどのルールを緩和
- 審査シートに評価項目を明確に記し、審査の曖昧さが生じない工夫をする
領域 7 では評価する 4 項目があり、それを点数化して採点している
評価基準が明確であれば、ある程度機械的に審査できるようになる

口頭発表賞の設置と運営方法

- 年次大会でポスター賞と口頭賞の両方を実施できる余裕があるか疑わしい
- 学会の開催方法が対面かオンラインかで運営の仕方が変わる
オンラインであれば部屋を移動する負担は比較的小さいと予想される
- 発表が優秀であるかを見極めるために講演時間を延ばした方が良い

今回の結論と方向性

- 年次大会に何らかの発表賞を設けることに反対はなかった
- 口頭発表賞を新設するよりは、運営方法がすでに確立されたポスター賞を次の年次大会で実施して、発表者の確保を早急に進めていきたい
- それと並行して、口頭発表賞の運営の仕方を議論していく
- 年次大会にポスター賞が新設されることを積極的に広報する

キーワードの大幅な見直しを実施

安齋より今大会で行われたキーワードの大幅な見直しについて、申し込み件数の内訳やプログラム編成時の問題点などが報告された。

プログラム編成を担った運営委員のコメント

- 5.光電子分光 6.放射光とその他のキーワードに垣根があった。今回は意識して混ぜ合わせを行い、「トポロジ」と「磁性体」のセッションを作ったトポロジのセッションは新鮮だった・楽しかったという感想を得た
- 「23.電子状態変化」の申し込み件数は多かったが、言葉が漠然として振り分けに寄与しなかった
二段階目の振り分け作業に放射光の運営員が担うと良いという意見が挙がった
- 「高次高調波」をテーマとする発表が多かったのでキーワードに加えると良い
- 第一と第二に「その他」があると良い
- 第一キーワードだけを記入した人が 7 名いて、その全員が「47.超イオン導電体・イオン伝導体」を選択していた。
47 を選択する人の受け皿となるキーワードがあると良い

今回の結論と方向性

- 運営委員から挙がった改善点をもう一度運営委員で話し合い、キーワードに取り入れていくかを議論する
- 申し込みの集計を続け、より良いキーワードになるよう議論していく